

りんどう

1 予報（9月）の内容

病害虫名	発生時期	発生量・感染量	予報の根拠
花腐菌核病	遅	少	(1) 今後2週間、最低気温が平年より高い日が多い見込み（8月27日、気象庁発表2週間気温予報）。 (2) 前年の発生量は、晩生種、極晩生種ともに平年より少なかった。（－） (3) 9月の降水量は、ほぼ平年並の予報。（±）
葉枯病	－	やや多	(1) 8月下旬の巡回調査での発生圃場率は、平年よりやや高かった。（＋） (2) 9月の降水量は、ほぼ平年並の予報。（±）
アザミウマ類	－	やや多	(1) 8月下旬の巡回調査での発生圃場率は、平年並だった。（±） (2) 9月の気温は、平年より高い予報。（＋）
ハダニ類	－	多	(1) 8月下旬の巡回調査での発生圃場率は、平年より高かった。（＋） (2) 9月の気温は、平年より高い予報。（＋）
アブラムシ類	－	並 (平年少発生)	(1) 8月下旬の巡回調査では、発生は確認されなかった。（－） (2) 9月の気温は、平年より高い予報。（＋）

記号の説明 (++)：重要な多発要因、(+)：多発要因、(±)：並発要因、(－)：少発要因、(－)：重要な少発要因

2 防除のポイント

【共通事項】

- 花腐菌核病とアザミウマ類は、収穫が終了した圃場が発生源となるので、収穫後の残った花茎は折り取り、圃場外に持ち出して処分する。
- 収穫が終了した品種でも防除を継続し、本年および翌年の病害虫の発生源となるのを防ぐとともに、株養成に努める。

【花腐菌核病】

- 9月は本病を主な対象に防除を行う。降雨が続く場合には散布間隔を短くして、予防散布に努める。
- 花卉に感染するので、収穫終了後の残花は折り取り処分する。
- 発病茎（特に花の部分）に形成された菌核が翌年の伝染源になるため、発病茎は折り取り、被害残渣を地面に落とさないよう注意して圃場外に持ち出し、処分する（図2）。



図1 花腐菌核病の多発圃場の状況 図2 通路に落ちた花蕾（翌年の発生源）

【葉枯病】

- 翌年の伝染源密度を減らすため、すでに収穫が終了した品種でも、収穫前品種とあわせて9月下旬まで防除する。
- 多発圃場では、上位葉に進展しないよう防除を徹底する。

【褐斑病】

- 薬剤が到達しにくい下位葉や畦の内部、畦の北側など日当たりの悪い場所で発生が多く見られることから、注意して圃場を観察し、発病葉の早期発見に努める。
- 発生がみられる圃場では、翌年の伝染源をなくすため、被害茎葉は取り除いて圃場外へ運び出し、土中に埋めるなどして処分する。

【黒斑病】

- 圃場を確認し、発生がみられた場合は速やかに防除を行う。

【アザミウマ類】

- (1) 花蕾の着色に伴い成虫が飛来し増殖するので、花蕾が着色しはじめた頃から防除を実施する。
- (2) 収穫が終了した品種が発生源となるので、残花や残茎は折り取り処分する。折り取り処分ができない場合は、収穫前品種とあわせて防除する。

【ハダニ類】

- (1) 発生のみられる圃場では、速やかに防除を行う。
- (2) ナミハダニは、9月中旬以降に越冬成虫（オレンジ色を呈する）が出現し、薬剤が効きにくくなるので、防除は9月上旬までに実施する。

【アブラムシ類】

- (1) 栽培期間を通じて防除を実施する。
- (2) 各種ウイルス（CMV、BBWV、CYVV等）を媒介する可能性が高いため、収穫を終えた品種も薬剤防除を行うか、残った花茎を折り取り処分する。

【リンドウホソハマキ】

- (1) 発生が多い圃場では、速やかに効果のある薬剤を散布する。
- (2) 被害茎（図3、4）は折り取り、圃場外で処分する。

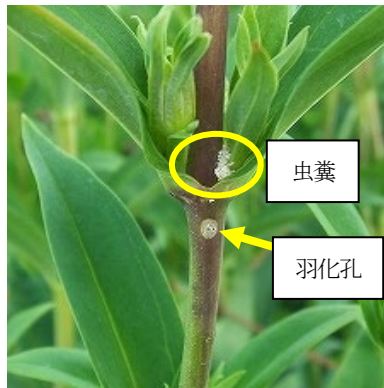


図3 茎に形成された羽化孔と
茎食入部の虫糞

※ 蛹は羽化孔周辺に存在する。品種により
差があるが、髓部を食害された部分の茎
が赤くなる場合が多い。



図4 リンドウホソハマキによる
花蕾被害部の着色

【オオタバコガ】

- (1) りんどうでの被害は花蕾部に円形の食入痕があるのが特徴的であり（図5）、花蕾内部に食入した幼虫は子房部を食害する（図6）。
- (2) 圃場をよく観察し、被害の早期発見に努め、発生時には効果のある殺虫剤を散布する（令和6年8月27日発表「農作物病虫害防除速報 No. 14 野菜・花き編-3」参照）。



図5 りんどうの花蕾部の食害痕



図6 りんどうの子房部の食害状況